

ドット・コムがデジタル・デバイスが

高成田 享

ドット・コムならぬドット・コムニズムという言葉について、思いをめぐらしている。この言葉を見つけたのは、ニューヨーク・タイムズ・マガジンの6月11日号。アンドルー・サリバンというフリーライターが書いた「ドット・コムニスト宣言」というエッセーのなかだ。

かれは、ナップスターという音楽交換ソフトを使うと、あらゆる音楽が手に入ることにショックを受けて、欲するままに情報が手に入る世界は、プラトンやトマス・モアやマルクスが描いた理想郷だとして、ドット・コムニズムという言葉でそれを表した。私もこのナップスターというソフトをダウンロードしてみたが、こんなソフトが広がれば、音楽の著作権など消えてしまうのではないかと危惧しただけで、ユートピアならぬEトピアだとは思わなかった。

ナップスターをダウンロードして、ナップスターに接続すれば、そのときに、オンラインで接続している同じナップスター族の音楽データならなんでもダウンロードできる。ビートルズでもマドンナでも、検索すれば、数百曲が画面に現れ、送信速度が速そうな相手を選んで、クリックすれば、DSLなどの高速通信にアクセスすれば、数分でダウンロードが完了する。聴いてみるまでは、それが本物かどうかかわからないが、ほとんどがCDからMP3にコピーしたものと思われ、そうであれば、音質的には、ほとんど元のCDと変わらないことになる。

米国でこれが爆発的に広まり、このソフトが登場してわずか1年で、ダウンロードした人の

数が1400万にも上ったのは、大学生が大学の高速コンピューターを利用したため。大学生は、新しい曲を次々とCDに焼き付け、それを流通させている。レコード業界のクレームで、多くの大学は学生にナップスターの使用を禁止している。それでも、このソフトが衰えることを知らないのは、家庭にもDSLなどの高速通信網が普及してきたからだろう。逆に、日本でこのソフトがあまり浸透しないのは、高速通信網の広がりが鈍いからだろう。宇多田ひかるの曲はたくさん見つけることができるが、美空ひばりや都はるみはまだ見つけたことがない。

ともあれ、米国のレコード産業は、こんなソフトが出回れば、CDは売れなくなるとして、損害賠償やら、ソフトの差し止めやら、つぎつぎと訴訟攻勢に出ている。裁判の結論はわからないが、はっきりしているのは、たとえ、ナップスターを禁止しても、同じようなソフトはいくつも出てくるということだ。現に、すでに同じようなソフトが生まれているし、グヌーテラというソフトは、ナップスターを進化させたものといわれ、これも急速に普及しつつある。ナップスターは、ナップスターの提供する検索画面がデータベースの中央にあり、ナップスターがサービスの提供を中止すれば、ナップスターは使えなくなるのに対して、グヌーテラは、こうした中央広場がなく、ここに接続したコンピューター同士で、互いのソフトを交換する仕組みだから、グヌーテラの使用を制限するのは難しい。しかも、グヌーテラの交換できるデータは、音楽を主とするMP3ファイルだけでなく、画像ファイルなどもある。

光ファイバー、ケーブル、DSLなど、大容

量のデータを運べる高速通信網が浸透していけば、インターネットで流せるものは、ビデオ映画から学术论文まで、ほとんどがこうしたソフトを通じて、無料で手に入れることができるようになるだろう。レコード業界などは、懸命にコピーさせない方策を考えているが、そうした努力はまたハッカーたちの絶好の標的となるだけだろう。ナップスターを訴えたヘビメタのグループ、メタリカのように、ネットを通じてのコピー時代に恐怖を感じているミュージシャンは多いが、逆に、ネットを利用すれば、レコード会社のビジネス戦略から離れて、自由な音楽活動ができると考えているミュージシャンもいるし、CDでかせぐ時代は終わって、ライブとTシャツだと割り切っている人たちもいる。

経済的にいえば、音楽や映像ソフトなどをつくるインセンティブがなくなるわけで、ネットの普及がCDやビデオ映画を衰退させるということになりそうだが、CDならコピーしにくい曲目紹介のパンフレットをつけて、オリジナルのCDを所有する価値を強調したり、ビデオなら高品位画像や大型画面での利用を促したり、商売の工夫はいくらも出てくるだろう。

とはいえ、こうしたソフトが普及していけば、コンピューターソフトなどのコピーを防ぐのはきわめて難しくなるだろう。だいたい、ソフトのコピーは法律違反などといって、消費者の倫理にまかせるのは所詮無理があると思う。先日、日本からマイクロソフト社の「オフィス 2000」というソフトを取り寄せたところ、何人かの知人からは、「私が貸してあげたのに」という言葉を聞いた。いや、コピーは違反だからと答えたものの、ビル・ゲイツ氏の8兆円の資産をふやすのに一役買ったのかと思うと、ばかばかしくなった。少なくとも、消費者に踏絵を踏ますような仕組みはおかしいと思う。

ドット・コムニズムという言葉に関心を抱

いたのは、ネット上の情報の問題だけではなく、このところ南北問題について考える機会が多かったせいもある。戦後の経済体制は、先進国と途上国との「南北格差」の是正、あるいは、途上国の経済発展を大きな課題として、先進国は多額の資金を経済協力や援助の形で出してきた。しかし、格差は縮小するどころか拡大する一方になっている。その最大の要因は、一次産品価格が低迷し続けているのに対して、工業製品、とくにハイテク製品は、次々に新しい製品を生み出すのも含めて、高い価格を維持することができたことだと思う。

一次産品と二次的な工業製品との実質的な等価交換がなされていないのは、買い手と売り手の力関係の差もあるが、多くの一次産品が価格が上昇すれば、生産をふやすし、価格が下落しても、飢餓輸出のような形で増産するしかないのに対して、工業製品の場合、特許など知的所有権が生産の安易な拡大と拡散をふせいできたこともあるように思う。戦後の日本が工業国として、ここまでキャッチアップしてこれたのは、知的所有権の網をかいくぐる「応用力」がすぐれていたからだろう。しかし、80年代以降の米国を中心とする先進工業国は知的所有権の保護に本腰を入れ始めた。

情報技術（IT）の時代が進むにつれて、デジタル・デバイドが大きな問題になってきた。たしかに、ITの勢いをみると、米国のひとり勝ちの印象が強く、先進国間でも格差が出てきたなかで、途上国は置いてきぼりになっているように見える。しかし、途上国でも、たとえば大学のような公的機関に高速通信網が整備されるにつれて、ビジネスにつながるさまざまなソフトが開発されてくる可能性は広がるように思う。90年代までの工業製品時代は、マスとしての労働力から、道路や電気などのインフラ、裾野が広い部品産業まで、フルセットの工業化モデルが必要だった。しかし、IT時代は、高速通信網

がインフラとしてあれば、コンピューター・エンジニアと創造力を持った少数の人間がいれば、そこに、大きな IT ビジネスをつくることは可能かもしれない。

そうなると、これからの情報化時代は、工業化時代よりも、南北格差は出てこないのではなか、という期待すら出てくる。もちろん、そうであっても、こんどは、途上国のなかでの格差

が広がるなど、問題は尽きないが、可能性が広がっていることは確かだ。

ビジネスのインセンティブが働かないドット・コミュニズムばかりでは困るが、工業資本主義の時代に比べて、ドット・キャピタリズムの時代のほうが逆転のチャンスがあると思う。
(2000/722)